勝手にコーヒーブレイク　８４

趣味は広―く浅くいろいろと。続かなかったものもたくさんあるが、現在、「書道」「水彩画」「お茶」「絵手紙」を習い中。子育てより花育てにかまけたり、50 代から始めたカメラや山歩きは、友だちと楽しんでいる。そんな数ある趣味の中ではなんといっても筋金入りは旅行である。幼い頃より毎年春と夏は、関東から九州まで父に連れられて家族旅行した。私にとって旅がどれだけ楽しかったか、帰りの列車が大阪駅に着くころ、泣きそうになるくらい名残り惜しかった。学生時代は友だちと、結婚後も旅好きの夫と家族旅行。94 年に友だちと初めて海外旅行に出て以来外国にも何度か、国内旅行は数知れず。

今でこそ、誰もが自由に海外旅行の発信ができるが、1959 年から 90 年まで海外への旅の先駆けとなったテレビ「兼高かおる世界の旅」。今年 1 月に 90 歳で亡くなられたが、その晩年のエッセイである。

「人生。最初の 1/3 は後に役に立つことを習う。次の 1/3 は世のため人のために尽くす。残り 1/3 は自分の好きなように使う」

私は人のためにはあまり尽くさなかったけれど、この先元気に動き回れるのも 10 年あるかどうか、最後は好きなことして…ということで、19 年働いた週２回の仕事もこの３月で辞めた。辞めてもヒマ感はなく、先週も水彩画教室作品展を終えたばかり、５月末には北海道ドライブ旅行が待っている。

兼高かおるに限らず、何かに秀でた人は学校時代はサボったり、勉強ダメ、はみ出た子が少なくない気がする。先生や親の言うことをちゃんと聞く良い子はグローバルな人間にはならないのかも。兼高かおるはアメリカのロスアンジェルス市立大学に入学、身体を壊して２年で帰国。物事が予定どおりにいかなくてもポジティブに捉えることって大事なのね。これがダメなら、あっちで。あれもアカンかったらこうやってみるかと臨機応変に、そのときどきのチャンスを生かして「世界の旅」の番組も続いたんだろう。

なるほど…と思ったのは、**「視聴者は自分が知っていることをテレビで観たいもの」**自分が行ってないところの景色風物をテレビで見るのも面白いけれど、訪れたことのある場所が映ると、「ここ行った、行った！」と誰もが指差したくなる。

今はシニア旅が多くなったが、**「楽しく旅をするためにはいい添乗員がついていると楽」**ツアー旅行なんて本当の旅ではないと言いそうな旅の評論家の中で、兼高さんは、言葉やホテル・お店選びに苦労するくらいなら、最初からしっかりした添乗員とガイド付きでゆとりを持って旅をエンジョイすることに専念したら良いと。その国の文化や歴史を説明してくれる添乗員やガイドの話を聞くと旅の面白さが倍になる。人工内耳ではなかなか 100％聞き取ることは難しいことも多いが、歩きガイドのときはワイヤレスミニマイクをガイドさんの胸に付けてもらったりして、昨年の中央ヨーロッパの旅も充実した。

番組放映時の時間の流れのため、取材では１つの国では同じ服を着続け、毎晩部屋で洗濯したそうだ。でも、泊まるホテルは自分の贅沢ではなく、スタッフや仕事のために一流の安全でいいホテルを取り、ケネディ大統領や著名人に会ってインタビューをこなした。

元気に飛び回った兼高さんも年取ると、若いころのノーメイクでシミ、腎不全、椎間板ヘルニアも患っている。80 歳のころに突然の大腿骨骨折で身動きできなくなってからは、携帯電話は必ず枕元に置くようにした。生涯独身の兼高さん、「誰かと一緒」と「１人」のバランスが大事と。会いたい人やおしゃべりしたい人がいて、いつでも会えるって幸せだ。**「忘れるものは忘れてけっこう。忘れる自由がある」**これからどんどん年取っていく私にも心強い言葉である。

『わたくしが旅から学んだこと』

兼高かおる　　小学館